

故松本光太郎准教授の思い出

村 上 勝 彦

松本光太郎准教授は、2010年3月、残念ながら帰らぬ人となった。短期休職していたが、4月からは元気に復帰し、あの熱心な授業と精力的な研究活動を再開するだろうと期待していた矢先のことである。何ともやりきれない気持ちである。私は松本准教授が本学に就任する以前からの、20年余の知合いなので、以後、松本さんと呼ぶことにする。松本さんとの付き合いは、中国の雲南に始まり、雲南に終わったといってよい。雲南省は、中国で最も多民族の地域で、民族研究の格好の対象地となっている。始まりはたしか、1989年頃だったと思う。松本さんから、『民族学研究』に掲載された『『漢族の子孫』としての少数民族』というタイトルの論文の抜刷を貰ったのが89年7月4日であり、たぶんその頃だと思う。後でふれるが、このやや変わったタイトルに、松本さんの考えが示されている。その1年前、故隅谷三喜男先生が学長であった東京女子大学と中国雲南民族学院が友好校となったことを機に、隅谷先生の強い要請のもとで日中の共同研究会が発足し、私もそのメンバーの一員に加えていただいた。幸いにもその研究プロジェクトはトヨタ財団からほぼ5年にわたる研究助成費をうけることになり、雲南少数民族地域での調査活動が始まった。プロジェクトの代表者は当時東京大学教授の故大林太良先生であり、当時、松本さんはその大林先生の大学院学生であった。

松本さんは、中国の四川大学と広西民族学院でそれぞれ長期の留学生生活を送り、それを終えて日本に戻ってきたところであった。大林先生の紹介で、雲南民族研究の実績と中国語の語学力を買われて、最初は調査補助・通訳として共同研究に参加し、後に正式メンバーに迎えられた。誰しも認めることだが、松本さんの中国語の力はたいしたもの、留学中に中国奥地に出かけて、聞き取り調査などで磨きがかけられたものと思う。私がうけた最初の印象・感想は、松本さんの回転の速さであった。頭の回転と同時に、口の回転も恐ろしく速い。日本語だけでなく中国語を話す時もじつに速かった。通訳としてはじつに適任ということになる。このような雲南での調査活動をつうじて松本さんの人柄を知り、能力を確信して、本学が文化人類学の教員採用人事を起こしたときに、私は松本さんをただちに推薦した。

この共同研究活動は、92年6月に「中国雲南少数民族の文化と近代化」のテーマで国際シンポジウムを催し、それをもって活動の幕を閉じた。松本さんはそのときにすでに専任講師として本学に就任しており、このシンポジウムでは司会と討論のまとめ役のほか、「雲南における社会主義建設と民族問題」のテーマで報告している。その報告で松本さんは自らの

故松本光太郎准教授の思い出

今後の研究で取り上げたい問題を指摘し、たとえば伝統的であるとみなしているものが実は必ずしもそうではないなどと述べている。さきにふれた『漢族の子孫』としての少数民族]にかかわる問題にも言及している。少数民族社会の現代化を共同体の崩壊という枠組みで単純に捉えるのではなく、少数民族と漢族など主要民族との歴史的関係をふまえて考察すべきだと強調している。私は専門外ではあるが、松本さんは歴史的考察、そこでの政治・経済的関係の重要性を指摘しているように思う。文化人類学にも多々あるであろうが、松本さんの文化人類学はそのような性格をもっていたのではないか。

雲南共同研究の場は、東京女子大学・トヨタ財団での幕が閉じられたあと、95年に本学における雲南研究会として再開された。同年4月、松本さん、廣井敏男・橋谷弘両先生と私の4名は、「中国雲南省の自然・民族・社会についての総合的研究」のテーマで、学内共同研究申請をおこない、その研究助成をうけて10月には雲南省のシーサンパンナ（西双版纳）への調査に出かけている。以後、本学の堺憲一・磯野弥生・手塚眞の先生方と雲南の劉剛先生が加わり、毎年のように雲南各地への調査活動がおこなわれ、また後年、プロジェクト研究所としての東京経済大学雲南研究所になっていった。松本さんは研究会・研究所の強力な牽引車であり、私などはいつも発破をかけられていたものである。とくに思い出すのは、シーサンパンナにおけるチノー（基諾）族の農民李二さん宅を訪問したときなど、松本さんも質問したいことが山ほどあるのだが、私の通訳としてそれを禁欲せざるをえなかった場面である。雨後の山道の泥でジープの車輪が空回りし、車を捨てて険しい道を登って苦勞の末にたどり着いた李宅でのことであった。

松本さんはこの研究会での調査活動とは別に、当然ながらご自身のテーマの調査・研究活動を精力的におこなっており、常に現地調査を心がけ、長期休暇になると中国を主としながらも近隣アジア諸国などへ頻々と出かけていた。貫った抜刷論文などで私が知る限りでは、民族識別問題とムスリムへの関心が強かったように思う。いずれも先にふれた歴史的考察、政治・経済的関係の重視と無関係ではないであろう。松本さんの言い方では、少数民族あるいはエスニック・グループを、変化するものとしてとらえ、社会的あるいは歴史的な文脈のなかで理解することが非常に重要であるということになる。最近ではとりわけムスリム研究を精力的におこなっており、数多くの研究成果を発表する一方、共同研究の代表者としても活躍していた。2005～07年度の科学研究費補助金による「中国ムスリムの宗教的・商業的ネットワークとイスラーム復興に関する学際的共同研究」がそれであり、松本さんは雲南省および東南アジアにおける回族・ムスリムの動態的研究を分担するとともに、研究全体の総括も担当している。松本さんはこのようなムスリム研究以外にも多くの論考をすでに発表してきたので、私はそれを纏めて発表することを強く勧めたことがあるが、ムスリム研究を先に纏めたいのだとの返答をうけたことを思い出す。ならばその纏めの発表をと強く期待していたときに、松本さんの訃報を知ったのである。松本さんが亡くなったことは残念至極であ

る。またその研究成果が世に出なくなったことも極めて残念なことである。ここで改めて松本さんのご冥福を祈りたい。